

あいさつ表現の中・日比較文化的研究

—「帰宅」におけるあいさつを中心に—

張 磊

I. はじめに

I.1. 研究の目的と先行研究

I.1.1. 研究の目的

あいさつは人間の交流において大切な言語行動である。一般的に、人間の交流はあいさつをすることから始まる。国境を越えた人間の交流がますます盛んになりつつある現在、他者と交流する時の基本的な言語行動として、あいさつ表現を学ぶことは重要であろう。

本稿では、「帰宅」に於けるあいさつ表現を対象に、中国と日本における用例を比較し、具体的な表現形式を記述して、あいさつ表現の差異の本質を明らかにする。

I.1.2. 先行研究

藤原与一(1992)は『あいさつことばの世界』で、「あいさつことばとは何か」「あいさつことばの独自性」「あいさつことばの民俗学」など、あいさつことばに関する基礎的な研究を行った。さらに、方言世界でのあいさつことばを発想法・表現型・分布の見地からの研究を展開してみせた。

本稿で、筆者は、藤原(1992)の日本における事例を参考にしながら、その考察を中日比較研究へと発展させたいと考えている。

江端義夫(2000)には、日常のあいさつに関するあいさつ表現の調査票が示されている。また、江端義夫(2001)は、日本全国で行った実地調査と通信調査のデータから描いた言語地図によって、あいさつ表現を考察している。「筆者の研究では調査票の作成において、江端(2000)を参考にして、筆者なりに独自の調査票を作成した。」

国立国語研究所(1984)は、1978年から1981年にかけて日本人とドイツ人と在日外国人を対象に、アンケート調査と観察調査などにより、日本人とドイツ人とのそれぞれの言語生活場面で営む言語行動の実態を記述し、両国語話者間の言語行動様式の差異を探求したものである。

ト雁(1990)は、あいさつの意味とあり方、あいさつ表現の場面と発話と条件などについて考察を行っている。これは、あいさつ行動様式に関する基礎的研究であるといえる。とりわけ、「出会いの場面」のあいさつを中心とした中日比較を行っていることが注目さ

れる。

施暉(2005)は「道」「買物・食事」でのあいさつを中心に、日中両国語における言語行動について研究を行っている。調査データから日中両国語における各場面でのあいさつを取り上げ、記述、分析、対照を行い、両国語の共通点や相違点を解明する試みを行っている。

I.1.3. 本研究の独自性

ト雁(1990)は、中日あいさつ比較研究の嚆矢として評価できる。とりわけ、基礎的な事柄が多く記述されている点に価値がある。他方、具体的な事例についての研究はあまり行われていない。施暉(2005)は、「道」「買物・食事」など具体的な事例について考察を行っているが、本研究で取り扱う「帰宅のあいさつ」については対象外とされている。以上のような研究状況下において、①「帰宅のあいさつ」を取り扱うこと、②その中日比較研究であることが本研究の独自性であると言える。

I.2. 研究の方法

I.2.1. 調査票

(1) 帰宅を家族にしらせるあいさつ

- ① 夕方、仕事から帰って、家族の者に帰宅を知らせるとき、自分の家の玄関の戸口(とぐち)で、どのようなあいさつをしますか。
- ② ①に応じて、どのような受け応えのあいさつをしますか。

I.2.2. アンケート調査

調査は、2005年8～10月(中国)、2006年2～4月(中国)、2006年3～5月(日本)に実施した。2005年8～10月(中国)と2006年3～5月(日本)での調査は留め置き調査法によって行った。2006年2～4月(中国)での調査は2005年8～10月(中国)の補充調査として行った。調査票を調査者の知人に送付し、調査票の配布と回集及び日本への返送を依頼した。

I.2.3. 調査データの分析方法

具体的なあいさつ表現の用例を分類して、日本と中国におけるそれぞれのあいさつ表現の特徴を明らかにする。さらに、調査データを統計化して分析する。

分類の方法は、まず各項目の調査データを発想法によって分類し、続いて具体的な事象によって分類した。

I.2.4. 調査の概要

調査実施場所と調査人数

日本…西日本地域（主に広島県東広島市）で200名を対象としてデータを収集した。

中国…中華人民共和国の東北地方（主に遼寧省大連市と吉林省松原市）で200名を対象にデータを収集した。その属性は表1、表2のとおりである。

表1 被調査者の内訳（¹小数点第2位以下四捨五入）

	年代	社会人	%	学生	%
日本人	全体	142	71.0%	58	29.0%
	男	72	36.0%	27	13.5%
	女	70	35.0%	31	15.5%
中国人	全体	147	73.5%	53	26.5%
	男	44	22.0%	34	17.0%
	女	103	51.5%	19	9.5%

表2 社会人の各年齢層と性別の分布

年代	日本人			中国人		
	全体	男	女	全体	男	女
20代 以下%	22	8	14	39	9	30
	11.0%	4.0%	7.0%	19.5%	4.5%	15.0%
30代 %	32	23	9	39	12	27
	16.0%	11.5%	4.5%	19.5%	6.0%	13.5%
40代 %	28	20	8	31	15	16
	14.0%	10.0%	4.0%	15.5%	7.5%	8.0%
50代 %	26	8	18	24	9	15
	13.0%	4.0%	9.0%	12.0%	4.5%	7.5%
60代 以上%	34	13	21	14	5	9
	17.0%	6.5%	10.5%	7.0%	2.5%	4.5%

II. 帰宅のあいさつについての分類

II.1. 分類の方法

あいさつ表現に関する用例を分類して、共通点と特徴を抜き出す。各項目のデータは、帰る人のあいさつは、A「掃るそのこと」とB「話題の焦点」の2種類に分け、答える人のあいさつはA「相対応答」B「相手への気遣いを述べる」の2種類に分けた。次の段階で具体的な表現形式によって分類した。

II.2. 発想法による分類

各表現形式を発想法によって分類すると次の通りである。

① 帰る人が発する表現形式の解析

- | | | |
|--------------|---|----------------|
| A 帰ることをとりあげる | } | a 帰るそのこと |
| | | b ただいま |
| | | c 事態を説明して帰る |
| | | d 声をかける |
| B 話題の焦点 | } | a 相手への自らの感覚 |
| | | b 相手への気遣いを述べる |
| | | c 天気への気遣い |
| | | d 料理に関する話題に触れる |

② 帰った人を迎える答えの表現形式

- | | | |
|-----------|---|--------------|
| A 相対応答 | } | a お帰り |
| | | b 時間応答 |
| | | c 簡単応答 |
| B 相手への気遣い | } | a お疲れ様 |
| | | b 今日はどうだった |
| | | c 天気への気遣い |
| | | d 準備したご飯に関して |

III. 帰宅のあいさつについての分類統計および考察

III.1. 夕方、仕事から帰って、家族の者に帰宅を知らせるとき、自分の家の玄関の戸口でのあいさつについて

本節における表現の統計は次の通りである。(統計表1)

	帰 宅	中 国		日 本	
	回 答 者 数	184		196	
	複 数 文 の 回 答 人 数	30		19	
	回 答 表 現 形 式 の 延 べ 数	215		215	
帰ることをとりあげる	a 帰るそのこと	178	82.8%	28	13.0%
	b ただいま	0	0.0%	182	84.7%
	c 事態を説明して帰る	0	0.0%	2	0.9%
	d 声をかける	24	11.2%	0	0.0%
話題の焦点	a 相手への自らの感覚	0	0.0%	1	0.5%
	b 相手への気遣いを述べる	2	0.9%	1	0.5%
	c 天気への気遣い	5	2.3%	1	0.5%
	d 料理に関する話題に触れる	6	2.8%	0	0.0%

Ⅲ.1.1. 発想法・表現形式における中日差異（単文の場合）

以上の表現の分類及び統計より中国も日本も「帰ることをとりあげる」の表現形式が一番多い。しかし、中国では「帰るそのこと」の表現形式は82.8%の高い比率がある。その代わりに、日本は「ただいま」の表現形式は84.7%の回答比率がある。「帰るそのこと」は第二番目の回答表現形式であるが、「ただいま」の表現形式より少ない。「帰るそのこと」と「ただいま」の具体的な事象は次の通りである。

- 「帰るそのこと」 中国・我回来了／我下班了
日本・帰りました／帰った／帰ったで／帰ったよ／帰ってきたよ／帰ってきたで
- 「ただいま」 日本・ただいま

中国では次に多いのは、「声をかける」の事象である。この表現形式は日本に見られない。

- 「声をかける」 中国・哎／嗨／hello

次に、中国では2.8%の「料理に関する話題に触れる」と2.3%の「天気への気遣い」の表現形式が見つかる、これに対して、日本は「料理に関する話題に触れる」が見つかれなかった、「天気への気遣い」の表現形式も少ない。

- 「料理に関する話題に触れる」 中国・有什么吃的／饿了
- 「天気への気遣い」 中国・今天可真热阿／今天可真冷阿
日本・外は寒かったよ

そのほかの表現形式は以下の通りである。

- 「事態を説明して帰る」 日本・遅くなってごめんなさい
- 「相手への自らの感覚」 日本・あーあくたびれた
- 「相手への気遣いを述べる」 日本・変わったことはなかったですか
中国・你们还好吧

以上、統計表1から分かるように中国も日本も「帰ることをとりあげる」の発想法に基づいた表現形式が9割以上を占めていることが知られる。しかし、中国は「帰るそのこと」の表現形式を使って、日本は「ただいま」の表現形式を使っている。

Ⅲ.1.2. 発想法・表現形式における中日差異（複数文の場合）

日本側における複数文の実際は次の通りである。

- 「帰るそのこと」＋「ただいま」（1）
- 「ただいま」＋x
x＝「帰るそのこと」（13）／「事態を説明して帰る」（2）／「相手への自らの感覚」（1）／「相手への気遣いを述べる」（1）／「天気への気遣い」（1）

日本側複数文の表現形式もやはり主に「ただいま」と「帰るそのこと」の表現形式であ

る。特に複数文の場合はほぼ「ただいま」と合わせての表現形式である。発想法によりますと、単文と同じく、主に、「帰ることをとりあげる」の発想法に基づいた表現形式である。

中国側における複数文の実際は次の通りである。

○「帰るそのこと」+ x

x = 「天気への気遣い」(2) / 「相手への気遣いを述べる」(1) / 「料理に関する話題に触れる」(6)

○「声をかける」+ x

x = 「帰るそのこと」(19) / 「帰るそのこと」+ 「相手への気遣いを述べる」(1) / 「天気への気遣い」(1)

中国側の複数文の表現形式は主に「帰るそのこと」と合わせた表現形式である。発想法の観点では、中国側は、単文と同じく、複数文においても主に、「帰ることをとりあげる」の発想法に基づいた表現形式である。

Ⅲ. 1. 3. まとめ

以上によれば、一番注目されるのは、帰る人の表現形式が日本側で「ただいま」、中国側で「帰るそのこと」になっている点である。「日本国語大辞典 大に版 第八巻」2001.8.20 小学館の解釈を以下に引用する。

〔「ただいま」の項：☐ [感動] ① (「ただ今帰りました」の略) 出先から戻ったときなどのあいさつの言葉。 *洒落本・妓娼椅子 (1818-30) 上「かうし戸をからからとあけ、はきものを見てかたわきのほうから上り『只今おやばからしうざいますわな、どこからお客だと思ったよ』 *浮雲 (1887-89) <二葉亭四迷> 一・四「ハイ只今、大層遅かったらうネ」 *問三味線 (1895) <齊藤緑雨> 一二「今に帰りましたらといふ時恰 (あたか) も帰るお浜、只今 (タダイマ) と裡 (うち) に入るを見るより」 *続いたづら小僧日記 (1909) <佐々木邦訳> 「唯今 (タダイマ)」といって、乃公 (おれ) は威勢好く鞆を投 (ほう) り出した」

〔日中辞典〕1995.2 小学館の解釈にしたがえば、

〔「ただいま」の項：☐我回来了。帰りました○お父さん、ただいま。爸爸、我回来了。あいさつ)

である。すると、発想法については、中国と日本とは、帰る人の表現形式がだいたい同じであると考えられる。これは、中国と日本との「帰宅」に関するあいさつの表現形式は同じと見てよいであろう。

両者は隣の国として、大昔から経済上・文化上の関係でつながっていて、「家庭」に対しての観念が同じ思想に立って歴史を形成してきたと理解できる。しかし、意味上では、中日で同じ発想法を認めることができても、単に、言葉本来の意味によって、中国は「帰

るそのこと」で「帰った」の意味を表現している。他方、日本は「ただいま」を使って、「帰った」の意味を表現している。「帰った」の意味を表現するとき、日本ではなぜ「ただいま、帰りました」のところが「ただいま」と省略するのであろうか。これは日本語の特徴だと思う。これについては、後ろに問題とする。

Ⅲ.2. 帰る人に受け応えのあいさつについて

本節における表現の統計は次の通りである。(統計表2)

	帰 宅 (応 答)		中国		日本	
	回 答 者 数		172		194	
	複 数 文 の 回 答 人 数		34		10	
	回 答 表 現 形 式 の 延 べ 数		208		204	
相 対 応 答	a お帰り	111	53.4%	188	92.2%	
	b 時間応答	7	3.4%	4	2.0%	
	c 簡単応答	25	12.0%	4	2.0%	
	相手への気遣い					
相手への気遣い	a お疲れ様	19	9.1%	6	2.9%	
	b 今日はどうだった	15	7.2%	1	0.5%	
	c 天気への気遣い	4	1.9%	2	1.0%	
	d 準備したご飯に関して	27	13.0%	0	0.0%	

Ⅲ.2.1. 発想法・表現形式における中日差異(単文の場合)

応答としてのあいさつは、中国と日本ともに「お帰り」の表現形式が一番多く見られる。しかし、日本では「お帰り」が92.2%の高い比率で見られる。一方、中国では「お帰り」の表現形式の割合は53.4%であり、日本ほど高くなく、かわりに、「簡単応答」「準備したご飯に関して」「お疲れ」「今日はどうだった」の表現形式が各々10%ぐらい見られる。その具体的な表現形式は以下の通りである。

- 「お帰り」 日本・お帰り／お帰りなさい
中国・回来了／下班了
- 「簡単応答」 日本・あーそう／はい
中国・知道了／哎／啊
- 「準備したご飯に関して」 中国・饿了吧／准备吃饭吧／马上开饭了
- 「お疲れ」 日本・お疲れ様でした／ご苦労さん
中国・辛苦了／累不／休息一会
- 「今日はどうだった」 日本・今日はどうだった
中国・今天忙吗？／同一天的情况／工作怎么样啊

そのほかの表現形式は以下通りである。

- 「時間応答」 日本・今日は早かったね／今日は遅かったねとか
中国・回来这么早／回来这么晚／怎么才回来

- 「天気への気遣い」 日本・今日は寒かったね
中国・外面冷不冷／天气的话

日本側の「お帰り」は90%以上の高い比率を持っている。それに対して、中国は53.4%の比率を持っている。全体的に見て、中国は日本より表現形式にバラバラな分布傾向が見られる。特に、「準備したご飯に関して」は中国では、二番目の回答率が見られるが、日本では見られなかった。「簡単応答」「今日はどうだった」も日本は中国より少ない。

Ⅲ.2.2. 発想法・表現形式における中日差異（複数文の場合）

日本側における複数文の実際は次の通りである。

- 「お帰り」+ x
x = 「時間応答」(2)／「お疲れ様」(4)／「今日はどうだった」(1)／「天気への気遣い」(1)／「天気への気遣い」+「お疲れ様」(1)

- 「簡単応答」+「お帰り」(1)

中国側における複数文の実際は次の通りである。

- 「お帰り」+ x
x = 「時間応答」(1)／「お疲れ様」(4)／「今日はどうだった」(4)／「天気への気遣い」(3)／「準備したご飯に関して」(10)

- 「簡単応答」+

x = 「お帰り」(5)／「お帰り」+お疲れ様+「準備したご飯に関して」(1)／「時間応答」(1)／「今日はどうだった」(1)／「準備したご飯に関して」(3)

- 「お疲れ様」+「準備したご飯に関して」(1)

複数文の場合中国も日本も「お帰り」と合わせての表現形式が一番多い。それに、「簡単応答」と合わせての対応形式も見られる。特に、中国側の複数文の場合には、三分の一ぐらい、先に「簡単応答」を発話して、次に、他の表現を使って補いの言い方で対応する。

Ⅲ.2.3. まとめ

以上、応えとしても回答を見ると、中国も日本も「お帰り」の表現形式が一番多いです。ほぼ半分以上の回答率がある。だから、「お帰り」の回答形式は中国と日本の共通点と認めます。しかし、日本では、92.2%の「お帰り」の表現形式に対して、中国では53.4%の回答率しかないだ。53.4%はもう半分以上の高い比率であるが、日本より40%近くのその他の表現形式がある。だから、日本は、定型的な表現形式と認めて、中国は不定形的な表現形式と認めるいいでしょう。

IV. 日本における「ただいまーお帰り」定型成立についての研究

IV.1. 日本における「ただいまーお帰り」の定型的な表現形式はいつごろ、どのような経緯で定着したか

先に『日本国語大辞典』（小学館）を引用して、「ただいま」という言い方が江戸の末期、（1818年～1830年）の洒落本『妓娼情子』が登場する箇所を記した。遊女の世界での粋な会話を活かした話し言葉である。まだ、「今」という時間を強調する用法に近く、厳密に「あいさつことば」にはなっていない。当時の話し言葉で小説を書くことを目指した二葉亭四迷の『浮き雲』（1887-1889）に「ただいま」が使用されているのを見ると、斬新な表現であったことが分かる。まだ、一般の庶民にとって、書き言葉を、小説の中に入れるのは、躊躇われたであろう。

したがって1800年代の文献に、「ただいまーお帰り」の言い方が登場するのは、予想外の沙汰と言って良いものと考えられる。

IV.2. 古代から近世末期まで、帰宅時の「ただいまーお帰り」の定型的なあいさつは、存在しなかった

『日本国語大辞典』および古典体系によれば、古典文学の世界、言い換えれば、貴族社会における出会いの場では、「ただいまーお帰り」の言い方が一定の社会的な認可を得ていなかったことがわかる。殆どの用例が、「今」という瞬間を強調したものばかりだからである。「丁度今」「正に今」「たった今」などの言い方で形容しうる言い方であり、今日でもそれらの言い方は見られる。

しかし、時間的な「今」の意味を無くして「おうい、帰ったよ」と声掛けをする挨拶に転じたものが、この「ただいま」である。極めてこれは、口語的成熟度の高いものである。書き言葉から、話し言葉への深化があればこそその言い方とすることができる。

それゆえに、宮廷の社会を写したり、合戦の場面を写したり、隠遁の世界を写したりする古典文学に登場しにくい理由は充分ある。

IV.3. 明治時代の「国定教科書」時代にも「ただいまーお帰り」の定型表現形式は見られない

明治五年に学制が発布された。その後の近代学校体系における国語教科書を見てみると、明治五年版では、知恵の環、うひまなび、単語篇、会話篇、小学綴字書、小学入門、小学読本、読方入門などの工夫が成されている。しかし、これらの書き言葉中心の教材には、日常のあいさつは取り上げられていない。

IV.4 大正期～昭和期の作家の作品に見られる「ただいまーお帰り」の用例

夏目漱石にも「ただいま」の用例がある。

- 「奥さんが催促すると、次の室で只今と応えるだけでした。」大正3年4月「こころ」p500

谷崎潤一郎にも、「ただいま」の用例がある。

- 「ナオミちゃん、只今…帰ってきたよ。」大正13～14年『痴人の愛』p321
- 「やあ、只今。と、私は門口に立っている上さんの顔を見るなり云いました。」大正13～14年『痴人の愛』p419、

三島由紀夫は、戦後の作家なので、当然、「ただいま」を使用する。

- 「母はすでに来て、老師の部屋で話しわしていた。私と鶴川は、初夏の日暮の緑先に膝まずき、只今帰りました、と言った。」昭和31年1月『金閣寺』p123
- また、司馬遼太郎も使用する。しかし、以下の例は、あいさつとは言えない。

- 「ただいま、斥候が帰って告げましたるところによりますとねこのさきの有年峠」昭和38年『国盗り物語』p76

これらの例により、普通の世帯人情を書く場合の一般的な会話になってきていると見て良い。

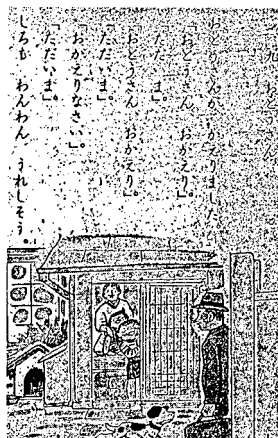
IV.5. 戦後の第六期国定国語教科書から一変する「会話中心の国語教科書」

昭和22年に教育基本法、学校教育法が成立した。それに伴い、小学校教育の目標の一つに「日常生活に必要な国語を、正しく理解し、使用する能力を養うこと」という目標が掲げられた。学習指導要領もそれまでの偉人伝や神話や神社神道の尊崇を旨とした教材を止め、日常生活の場面を取り上げるように変わった。

IV.6. 標準語としての「ただいまーお帰り」の成立

一昭和24年「まことさん はなごさん」のを読む一

昭和24年の「まことさん はなごさん」を典型例としてとりあげてみたい。小学校一年生の最初の教科書である。ここには、親しめるようにと、たくさんの「ひらがな」が使用され、使用場面を思い浮かべて、ことばを覚えていくような配慮が見える。



次に、昭和31年の教科書の例を掲げてみる。

この時代は、「ただいまーお帰り」の言い方は、新鮮な家庭の会話として、浸透していった。誰もがこの言い方に親しんだのである。お父さんがネクタイをして帰宅すると母親が割烹着を着て、出迎える。そのことばは、「お帰りなさい」である。帰った父親は、家族の者へ「ただいま」と言う。また、別の場面では、帰宅のあいさつを子供にも「ただいま」と言わせている。こうして、「家」に帰宅した時の共通の声かけが「ただいま」に決まったのである。これこそ、「標準語」と言って良いものである。

一旦、標準語に昇格した「ただいまーおかえり」は、あらゆる場面で使用されることとなる。

統計表に見る如く、90パーセントを越える数字で使用されている。その勢いは、他の表現に換えられことを拒む。定型の一般化には、驚くばかりの威力がある。中国の場合のように、定型の見られないのは、却って、興味ふかくさえ感じられる。

明治の国語調査委員会は、必ずしも、帰宅のあいさつに、定型的な標準語を決めたわけではなかった。明治の国定教科書には、「ただいまーお帰り」は載っていない。それが、一定の言い方に偏ってきたことは事実である。それを汲んで、標準語になった。それなりに良かったのであるが、戦後の口語重視の波に背中を押されて、「ただいまーお帰り」の言い方が、教科書に採用されたのが契機となって、広く、標準語視されることとなった。このように解釈することが出来る。



V. 終わりに

以上、「帰宅」のあいさつは以下4点がまとめる。

1. 中国も日本も帰宅の時「帰ることをとりあげる」発想法に基づいた表現がなされる。ただ、中国は「帰るそのこと」、日本は「ただいま」である。
2. 中国、日本とも迎える側のあいさつは「お帰り」の表現形式である。しかし、日本は単一の回答様式だが、中国は豊富な回答様式が見られる。日本は定型的な表現形式、中国は不定形の表現形式と認められる。
3. 日本において「ただいま」と「お帰り」は、両方とも90%ぐらゐの回答率が見られる。したがって、「ただいま」「お帰り」は日本の定型的な表現形式と認められる。
4. 日本における「ただいま」と「お帰り」の定型的なあいさつが定着したのは、調査の結果、昭和24年の国定教科書による、標準語の普及が契機であることが明らかになった。

VI. 参考引用文献

- 宇佐美まゆみ (1999.5) 「交感的コミュニケーションとしてのあいさつ行動」『国文学 解釈と教材の研究』44巻6号 pp.83-89 学燈社
- 江端義夫 (2000.11) 『全国あいさつ行動資料』広島大学教育学部国語文化教育学研究室
- 江端義夫 (2001.3) 「A Geolinguistic Study on the Greeting Expressions and Behavior in Japan」『社会言語科学』第3巻第2号 pp.27-38
- 岡部悦子 (2001.03) 「別れの「あいさつ」に関する一考察—日本語教育の視点から」『国語学研究と資料』15 pp.29-42 早稲田大学文学部
- 海後宗臣 (1963.11) 『日本教科書大系近代編第九巻国語六』講談社
- 樺島忠夫 (1963.9) 『表現論：ことばと言語行動』綜芸舎
- 学校図書研究会 (1956.1) 『こくご一ねんせい上』学校図書株式会社
- 学校図書研究会 (1948.7) 『こくご一ねんせい中』学校図書株式会社
- 国立国語研究所 (1984.3) 『言語行動における日独比較』三省堂
- 佐藤亮一 (1995.12) 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社
- 施暉 (2005.6) 「中日両国語に於ける「あいさつ」についての比較対照研究—大学生の「家庭」「訪問」「公園」での「あいさつ」言語行動を中心に」『国文学攷』188号 pp.17-34
- 卜雁 (1990.12) 「あいさつ行動様式に関する基礎的探究日・中語あいさつ表現の比較を中心として」『日本文化研究筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム紀要』2号 pp.131-148 筑波大学
- 藤原与一 (1992.12) 『あいさつことばの世界』武蔵野書院
- 文化庁 (2006.7) 『平成17年度国語に関する世論調査日本人の敬語意識』独立行政法人国立印刷局
- 王健宜 (1999.3) 「語言表达与日本人的感情世界」『日語学習与研究』pp.6-10 日語学習与研究雜誌社
- 徐萍飞 (2002.4) 「日語の定型化表达与日本人的思维方式」『浙江大学学报 (人文社会科学版)』pp.80-85 浙江大学

付 記

本稿及び修士論文の作成は指導教官の江端義夫教授に懇切なご指導を頂いて、博士課程の又吉里美さん、小川俊輔さんに多くの示唆を頂いて、成ったものである。ここに記して心より感謝申し上げる。また、アンケート調査にご協力下さった中日両国の方々に深く感謝の意を表したい。

— チョウ・ライ、広島大学大学院教育学研究科博士課程前期在学 —